

コロナ禍は、私たちの暮らしに

変化をもたらした。なかでも、住まい、あるいはその環境への影響は大きいものがある。テレワークなどの浸透により、家で過ごす時間が増加。それに伴い、新たな生活様式や住まいの在り方が、今、問われようとしている。

そんな世の中の動きを受けて、昨年UR都市機構が行ったのが「URまちの暮らしコンペティション」という住まいのアイデアコンペだ。

テーマは「スターハウスの未来(さき)にある暮らし」。スターハウスとは、昭和30年代を中心に建てられた団地の先鋭的な住棟のこと。上空から見ると、Y字型とも、星の形とも見えるユニークなデザイン。三方に突き出た各翼が1戸で、日当たりや通風は抜群。配置計画のポイントにもなり、変形敷地や斜面にも建設できるのも大きなメリットだった。

2019(令和元)年、旧赤羽台団地に建つスターハウス3棟と標準的な

た提案が目立ちました。最優秀作品は、年月を経て成熟した植栽をうまく活かし、住宅と住環境、外部の木を保存することも考慮したプランだったのが、高い評価を得たと思います」と審査を振り返る。

URの技術・コスト管理部技術調査課の渡辺 直担当課長は、今回のコンペの意義について次のように語った。「このコンペには、我々URと日本建築学会、地元北区が一丸となり、4棟の建物を歴史的遺産として残しながら活用していく、というメッセージが込められています。また、コロナ禍での団地の住まい方について若い世代の発想や知恵をお借りしたい、という狙いもありました。結果として、若い方々が団地の屋外環境や緑を積極的に評価してくださった。一職員として、『団地はそのままでもいいんだよ』と言われたようで、とてもうれしかったですね」

○団地の遺産を未来へつなぐ

コンペの舞台となった旧赤羽台団地は、2000年から、ヌーヴェル赤羽台として再生に着手。登録有形文化財4棟が建つ場所は、今後「赤羽台情報発信施設(仮称)」として整備される。



新たな住まいの在り方を探る コンペティションを開催

URまちの暮らしコンペティション
2021年●令和3年



阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

住棟である板状階段室型住棟1棟が、高度経済成長長期の標準的な団地の住棟形式を今に伝える貴重な事例として、団地初の登録有形文化財として認めれた。

今回のコンペは、このスターハウスを題材に、「スタンダード」を越えた先にある住まいの在り方」の提案を求めたもの。最優秀受賞者は、提案内容の実現に向けて、デザインアーキテクトとして基本検討に参加できることもあり、国内外から300以上の応募が集まった。

○豊かな屋外環境を活かす

審査員による議論の末に最優秀賞を勝ち取ったのは、洲崎洋輔さん(洲崎洋輔建築設計事務所)と寺田彩瑛子さん

施設内のスターハウスには今回の最優秀賞を実現可能なかたちで提案住戸として整備するほか、新築施設も整備される。同潤会代官山アパートなども含む4団地6住戸を再現予定で、コンセプトは『空間標本』。実際に中に入って体験できるのが特徴だ。前面はガラス張り、再現住戸を外から標本のように眺められるのも楽しい。ほ



最優秀賞を受賞した作品の新たな住まいの未来像。



ん(KAJIMA DESIGN)の『大きなケヤキと囲い庭』だ。5階建ての建物を超すほどに育ったケヤキが目前にある環境と、スターハウスの開放性を最大限に活用。緑豊かな環境を、囲い庭を住宅に取り入れることによって満喫する提案が高く評価された。

2人は大学の同期で、共に30代にたったばかり。洲崎さんは「60年前の思想で設計されているものを現代のライフスタイルにアジャストし、環境の良さを残しながら、未来につなげられるようなプランを考えました」とアイデアの狙いを説明。「現地を訪れて、大きなケヤキと周囲の緑に感動しました。住民の方に愛されているスターハウスの風景を保存しながら、囲い庭という建築的な新しさを提案し、ここでしかできない住まい方を提案することに力を注ぎました」と寺田さんも言葉を添える。

審査委員長を務めた工学院大学の木下庸子教授は「応募作はどれも力作で、スターハウスが登録有形文化財に登録されたことへの社会的関心の高さを実感しました。また、コロナ禍での暮らしの変化に対し、自然通風や外部テラスなど、自然との関わりを意識し

かにも、壁床4面スクリーンや模型などで団地の歴史を展示するなど、都市の暮らしの歴史や未来を体験できる施設となる予定だ。「敷地内には、昔からの藤棚なども残した屋外空間とする計画になっています。団地にお住まいの方が愛着を持って、地域の方も楽しめる施設になる予定です」とURの渡辺は説明する。

こうした一連の取組に対して、木下教授もエールを送る。

「今回のコンペでは、歴史的遺産となった住棟に新たな命を吹き込むためにアイデアを募り、今後の改修の手がかりにしようとするURさんの姿勢に、建築家として勇気づけられました。今後は、60年にわたって集合住宅を作り、都市開発を行ってきたノウハウと技術を活かして、歴史的建築を次の世代につながるリーダーになっていただきたいですね」

赤羽台情報発信施設の開設計画は、2023年春。団地の歴史を未来につなぐ、その公開が待たれる。